

伊東靜雄 本文整理稿

— 『定本 伊東靜雄全集』 逸文二篇／生前作品集

碓井雄一

はじめに

伊東靜雄書誌につき、私がささやかな為事の報告を開始したのは「研究動向 伊東靜雄」(昭和文学会『昭和文学研究』29、94・7)である。以下、「伊東靜雄の「全集」と「文庫本」・覚書——本文についてのひとつの報告を含めて」(群系の会『群系』9、96・8)、「定本 伊東靜雄全集」逸文の紹介、ならびに補説」(昭和文学会『昭和文学研究』48、04・3)、「伊東靜雄参考文献目録稿——(1)単行本・雑誌特集号・没後作品集」(近代文学資料と試論の会『近代文学資料と試論』3、04・11)、「伊東靜雄参考文献目録稿」・増補」(同右『近代文学資料と試論』4、05・6)、以上の通りに地味な歩みを進めて来た。自稿名の列挙は誇示ではなく、書誌の為事が中仕切りの永続的反复であることを明示するた

めである。実際それ以後も新見資料の報告が相継いでいる。管見の限りで最新は、伊東の青年期である一九二四年一月三日から一九三〇年六月一〇日にかけて、大学ノート五分冊で綴った日記の発見報告、柘和典／吉田仙太郎／上野武彦編『伊東靜雄日記 詩へのかどで』(思潮社、10・3)である。日記ノート自体は山本花子との結婚(一九三三年四月)を控えた時期に、実弟の井上寿恵男に託されたとのこと、(略)このときの詩人のことばが伝わっている。「この日記はだれにも見せないようにしてもらいたい」と。新妻に見せたくないという配慮からだとされている。(吉田「編集後記」)

発見の重要性は言うまでもない。伊東靜雄の「現在」が新たな像として現象する、本発見はその可能性に向けた力になる筈である。遺憾は(自筆原本は原則として旧仮名遣いであるが、本書ではすべて新仮名遣いに改めた)(凡例)という

校訂方針である。本文の改竄ではないのか。慎重／厳正な判断が必要であったと惜しみたい。

何れにせよ、『定本 伊東靜雄全集』（人文書院、89・4初版第七刷。以下『定本全集』と略記）につき、最新の成果を踏まえ、新たに組み直しての再刊を私は夢想する。

異同確認につき、詩集収録作品『わがひとに与ふる哀歌』（杉田屋印刷所、35・10）は初版復刻版（日本近代文学館、83・8）に、『詩集夏花』（子文書房、40・3）は初版復刻版（冬至書房、71・8）に、『春のいそぎ』（弘文堂書房、43・9）は初版に、『反響』（創元社、47・11）は初版に、拾遺詩篇／散文はそれぞれの初出に拠る。旧字体は（伊東靜雄）の場合のみ残し、人名も含め原則として新字体に改める。ルビ／句読点のみの異同には触れない。編者につき、奥付等に明記がない場合は（編なし）とする。刊行年の表記は奥付に拠る。

一 『定本全集』逸文の紹介

●則武三雄『鴨緑江』（第一出版協会、昭18・11・20）序詩
則武は三好達治門下の詩人、福井土着の文学者として名を成すが、本書「跋」には「序文をくださった三好達治師、また序詩をあたへられた伊東靜雄氏に衷心謝する」とある。なお、『定本全集』には本逸文の原型と思われるものが、「散

文 雑」に収載されていることを明記しておく。

わかきさのわかき
心がみたりけるゆ
めなつかしやきみ
がありなれ

伊 東 靜 雄

逸文はもう一篇ある。後掲『現代詩 現代日本文学選集第一巻』の項目にて紹介する。

二 生前作品集

●新井徹／上野壮夫／小熊秀雄／大江満雄／遠地輝武／北川冬彦／郡山弘史／後藤郁子／千家元麿／田木繁／森山啓編『一九三四年詩集』（前奏社、昭9・10・20）
「帰郷者」。詩集（『わがひとに与ふる哀歌』。以下『哀歌』と略記）本文との異同、（辛苦ののちに）が（辛苦の後に）、（あそ処で）が（あそこで）。

●小川十指秋編『現代日本詩人選集』（動脈社、昭11・1・10）

「曠野の歌」「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」。詩集（『哀

歌」本文との異同、「曠野の歌」、(わが屍骸を)が(わが亡骸を)。「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」、(いい時と)が(いゝ時と)。

●前田鉄之助編『全日本詩集 第一巻』(詩洋社、昭13・2・10)

「水中花」。詩集(『詩集夏花』)。以下『夏花』と略記)本文との異同、詞書の冒頭一字下げ、(萌えいでにける)が(萌え出でにける)、(われ空に投げうつ)が(吾空に投げうつ)。

●前田鉄之助編『全日本詩集 第二巻』(詩洋社、昭14・8・20)

「野分に寄す」。詩集(『夏花』)本文との異同、(恒に覚めるむ事を希ふ)が(身を空想するを悦ぶ)、(窓を透し)が(窓をすかして)、(摘まざるままに)が(摘まざるまゝに)、(縫れて浚はれゆく)が(もつれて浚はれてゆく)、(あはれ汝らが)が(汝らが)、(こころ)が(こゝろ)。

●編なし『現代詩集 第二巻』(河出書房、昭15・1・20)

章題「反響」。作品掲載に先立ち「覚書」として(これは、大部分を「わがひとに与ふる哀歌」(昭和十年)から、一部を「詩集夏花」(昭和十四年)からえらんだもので、後者を始めの方に並べた。(改行、一行空け)現代の雑多な

印刷物になれすぎた眼が、あまりに性急に読まねばいいが。とある。詩集(『夏花』『哀歌』)本文との異同が全篇に亘って細かく見られ、全篇をそのまま掲げる。本体扉／章扉は(伊藤静雄)と誤植(目次は(伊東静雄))。

夜の章

いちばん早い星が空にかがやき出す刹那はどんなふうだらうそれを誰れがどこで見てゐたのだらう

とほい湿地のはうから闇のなかをとほつて葦の葉ずれの音がきこえてくる

そして いまわたしが仰ぎみるのは空に散つて揺れさだまつた星の宿りだ

最初の星がかがやき出す刹那を見守つてゐたひとはいつのまにか地を覆うた六月の夜の闇のあまりのふかさに驚いて

あたりを透かし見まはしたことだらう

そして あのまつくらな湿地の葦はそのときつとそのひとの耳へととほく鳴りはじめたのだ

夢からさめて

この夜更けに わたしの眠りをさましたものは何の気配か。
硝子窓がらすまどの向ふに あゝ 今夜も耳原御陵みきはらじりやうの丘の斜面で

火が燃えてゐる。そして それを見てゐるわたしの胸が
なぜとも知らずひどく動悸をうつのを感ずる。なぜとも知ら
ず？

さうだ、わたしは今夢をみてゐたのだ、故郷ふるさとのわが古家ふるやのこ
とを。

ひと住まぬ大きな家の戸をあけ放ち、前栽に面した座敷にすわ
り、

独りで私は酒をのんでゐたのだ。夕陽は深く廂に射しこん
で、

それは現うつらの目で見たどの夕影よりも美しかった。何の表情も
ないその冷たさ透明さ！

そして庭には白い木の花が夕陽のなかに咲いてゐた。
わたしの幼時の思ひ出の取継つぎる術すべもないほど端然と……。

あゝ この私の夢をさましたのは、さうだ、あの怪しく猥みだらく
御陵みさだせの夜鳥の叫びではなかつたのだ。それは夢のなかでさへ
わたしがうたつてゐたひとつの歌の哀しみだ。

かしこに母は坐し給ふ
紺碧こんせきの空の下

春のキラめく雪深ゆきふかに
枯枝かれえを張りし一本ひとぽんの
木高こたかき梢

あゝその上にぞ
わが母の坐したまふ見ゆ

沫雪 立原道造氏に

冬は過ぎぬ 冬は過ぎぬ。匂ひやかなる沫雪あわゆきの
今朝けさわが庭にふりつみぬ。籬かき・枯生かれふはた菜園さいえんのうへに
そは早き春の花よりもあたたかし。

さなり、やがてまた野いばらは野に咲き満たむ。

さまざまなる木草きくさの花は咲きつがむ あゝ その
まつたき光りの日にわが往きてうたはむは何処いづこの野べ。

……いな、いな……耳傾みみかたけよ。
はや庭をめぐりて競まきひおつる樹々のしづくの
雪解ゆきとけけのせはしき歌はいま汝なれをぞうたふ。

夕の海

徐かで、確実な夕闇と、絶え間なく揺れ動く
白い波頭とが、灰色の海面から迫つて来る。

灯台の頂には、氣付かれず緑の光が点される。

それは長い時間がかゝる。目あてのない
無益な予感に似たその光が

闇によつて次第に輝かされてゆくまでには――。

が、やがて、あまりに規則正しく回転し、倦むことなく

明滅する灯台の緑の光に、どんなに退屈して

海は一晩中横はらねばならないだらう。

水中花

水中花といつて夏の夜店に子供達のために売る品がある。木
のうすいうすい削片を細く圧搾してつくつたものだ。その
まゝでは何の変哲もないのだが、一度水中に投ずればそれは
赤青紫、色うつくしいさまさまの花の姿にひらいて、哀れに
華やいでコップの水のなかなかに凝としづまつてゐる。都会
そだちの人のなかには瓦斯灯に照しだされたあの人工の花の
印象をわすれずにゐるひともあるだらう。

今歳水無月などかくは美しき。

軒端を見れば息吹のごとく

萌えいでにけり釣しのぶ。

忍ぶべき昔はなくて

何をか吾の歎きてあらむ。

六月の夜と昼のあはひに

万象のこれは自ら光る明るさの時刻。

遂ひ逢はざりし人の面影

一莖の葵のはなの前に立て。

堪へがたければ吾空に投げうつ水中花。

金魚の影もそこに閃きつ。

すべてのものは吾にむかひて

死ねといふ。

わが水無月のなどかくはうつくしき。

若死

大川の面に鋭い皺が寄つてゐる。

昨夜の水は解け始めた。

アロイヂオといふ名と終油とを授かつて、

彼は天国へ行つたのださうだ。

大川は張つてゐた氷が解け始めた。

鉄橋のうへを汽車が通る。

さつきの郵便で彼の形見がとゞいた。

寝転んでおれは舞踏といふことを考へてゐた時。

しん底冷え切つた朱色の小匣の、

真珠の花の螺鈿。

若死をするほどの者は、

自分のことだけしか考へないのだ。

おれは此の小匣を何処に蔵つたものか。

気疎いアロイヂオになつてしまつて……。

鉄橋の方を見てゐると、

のろのろとまた汽車がやつて来た。

八月の石にすがりて

八月の石にすがりて

さち多き蝶ぞ、いま、息たゆる。

わが運命を知りしのち、

たれかよくこの烈しき

夏の陽光のなかに生きむ。

運命？ さなり、

あゝわれら自ら孤寂なる発光体なり！

白き外部世界なり。

見よや、太陽はかしこに

わづかにおのれがためにこそ

深く、美しき木蔭をつくれ。

われも亦

雪原に倒れふし、飢ゑにかげりて

青みし狼の目を、

しばし夢みむ。

朝顔 辻野久憲氏に

去年の夏、市中の一日中日差の落ちて来ないわが家の庭に、

一茎の朝顔が生ひ出でたが、その花は、夕の来るまで凋むこ

とを知らず咲きつづけて、私を悲しませた。その時の歌、

そこと知られぬ吹上の

終夜せはしき声ありて

この明け方に見出でしは

つひに覚めぬしわが夢の

朝顔の花咲けるさま

さはれみ空に真昼過ぎ

人の耳には消えにしを

かのふきあげの魅惑にまどほし

わが時逝きて朝顔の

なほ頼みある花のゆめ

夏の歎き

われは叢に投げぬ熱き身とたゆき手足を

されど草いきれは

わが体温よりも自足し

わが脈搏は小川の歌を乱しぬ

夕暮よさはれ中つ空に

はや風の涼しき流れをなしてありしかば

鵲の飛翔の道は

ゆるやかにその方角をさだめられたり

あゝ今朝わが師は

かの山上に葡萄を食しつつのたまひしか

われ縦令王者にえらばるとも

格別不思議に思はざるべしと

曠野の歌 萩原朔太郎氏に

わが死せむ美しき日のために

連嶺の夢想よ！ 汝が白雪を

消さずあれ

息ぐるしい稀薄のこれの曠野に

ひと知れぬ泉をすぎ

非時の木の実熟るる

かくれたる場所を過ぎ

われの播種く花のしるし

近づく日わが屍骸を曳かむ馬を

この道標はいざなひ還さむ

あゝかくてわが永久の帰郷を

高貴なる汝が白き光見送り

木の実照り 泉はわらひ……

わが痛き夢よこの時ぞ遂に

休らはむもの！

秧鶏

秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る（チエーホフ）

秧鶏のゆく道の上に

匂ひの朝風は要らない
レース雲もいらぬ

霧がためらつてゐるので
厨房のやうに温いことが知れた
栗の矮林を宿にした夜は
反落葉にたまつた美しい露を
秧鶏は寢酒にして呑んでしまふ

波のとほい白つぽい湖辺で
そこがいかにもアツト・ホームな雁と
道づれになるのを秧鶏は好かない
強ひるやうに哀れげな昔語りは
ちぐはぐな合槌できくのは骨折れるので

まもなく秧鶏は僕の庭にくるだらう
そしてこの伝記作者を残して
来るときのやうに去るだらう

四月の風

私は窓のところに坐つて
外に四月の風の吹いてゐるのを見る。

私は思ひ出す、いろんな地方の町々で
私が識つた多くの孤児の中学生のことを。

真実彼らは孤児ではないのだつたが
孤児！と自身に故意と信じこんで、
この上なく自由にされた氣になつて
おもひ切り巫山戯け 悪徳をし
ひねくれた誹謗と飲び！

また急に悲しくなり
おもひつきの善行でうつとりした。

四月の風は吹いてゐる、ちやうどそれ等の
昔の中学生の調子で。

それは大きな恵で気づかずに
自分の途中に安心し、

到る処の道の上で悪戯をしてゐる。
帯ほどな輝く瀬になつて

逆に、後に残して来た冬の方に
一散に走る部分は、

老いすぎた私をからかふ。
曾て私を締めつけた

多くの家族の絆はどこに行つたか。
又ある部分は、

見せかけだと私にはひがまれる
甘いサ行の音で

そんなな誘ひをかけ、
あるものには未だ若かすぎる
私をこんなに意地張らずがよい。
それで も一つの絆を
そのうち私に探し出させて呉れるのならば。

わがひとに与ふる哀歌

太陽は美しく輝き
あるひは 太陽の美しく輝くことを希ひ
手をかたくくみあはせ
しづかに私たちは歩いて行つた
かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
無縁のひとはたとへ
鳥々は恒に變らず鳴き
草木の囁きは時をわかつたずとするとも
いま私たちは聴く
私たちの意志の姿勢で
それらの無辺な広大の讃歌を
あゝ わがひと！
輝くこの日光の中に忍びこんである

音なき空虚を
歴然と見わくる目の發明の
何にならう
如かない 人気ない山に上り
切に希はれた太陽をして
殆ど死した湖の一面に遍照させるのに

寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

耀かしかつた短い日のことを
ひとびとは歌ふ
ひとびとの思ひ出の中で
それらの日は狡く
いい時と場所とをえらんのだ
ただ一つの沼が世界ぢゆうにひろがり
ひとの目を囚へるいづれもの沼は
それでちつぽけですんだのだ
私はうたはない
短かつた耀かしい日のことを
寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ

病院の患者の歌

あの大へん見はらしのきいた 山腹にある
友人の離室^{はなれ}などで

自分の肺病を癒さうとしたのは私の不明だつた
致命的なことに あそこには計画だけがあつて
訓練^が欠けてゐた

今度の 私のはひつた町なかの病院に
来て見給へ

深遠な書物のやうなあそこでのやうに

景色を自分で截り取る苦勞が
だいいち 私にはまぬかれる。

そして きまつた散歩時間がある

狭い中庭に コースが一目でわかるやう

稲妻やいろいろな平仮名やの形になつてゐる

思ひがけず接近する彎曲路^{まげろ}で

他の患者と微笑を交はすのは遜^{へりくだ}つた楽しみだ

その散歩時間の始めと終りを

病院は患者に知らせる仕掛として——振鈴などの代りに

俳優のやうにうまく躡けた犬を鳴かせる

そして私達は小氣味よく知つてゐる

(僕等はあの犬のために散歩に出てやる)と

あんなに執念く私の睡眠の邪魔をした
時計は この病院にはないのかつて？

あるよ あるにはあるが 使用法がまるで違ふ

私は独木舟にのり猟銃をさげて
その十二個のどの島にでも

隨時する意に上陸出来るやうになつてゐる

冷い場所

私が愛し

そのため私につらいひとに

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷いこの岩石の

場所にこそ

私は強ひられる——

私は強ひられる この目が見る野や

雲や林間に

昔の私の恋人を歩ますることを

そして死んだ父よ 空中の何処で

噴き上げられる泉の水は

区別された一滴になるのか

私と一緒に眺めよ

孤高な思索を私に伝へた人!

草食動物がするかの楽しさうな食事を

海水浴

この夏は殊に暑い 町中が海岸に集つてゐる

町立の無料脱衣所のへんはいつも一ぱいだ

そして悪戯ずきな青年団員が

掏摸を釣つて海岸をほつつきまはる

町にはしかし海水浴をしない部類がある

その連中の間には 私をゆるすまいとする

成心のある噂がおこなはれる

(有力な詩人はみなこの町を見捨てた)と

かの微笑のひとを呼ばむ

.....

われ烈しき森に切に慄つかれて

日の了る明るき断崖のうへに出でぬ

静寂はそのよき時を念じ

海原に絶ゆるなき波濤の花を咲かせたり

あゝ黙想の後の歌はあらじ

われこの魍魅おもての白き穂波踏み

夕月におほ海の面おもて涉ると

かの味気なき微笑のひとを呼ばむ

河辺の歌

私は河辺に横はる

(ふたたび私は帰つて来た)

曾ていくどもしたこのポーズを

肩にさやる雑草よ

昔馴染の 意味深長な

と嗤ふなら

多分お前はま違つてゐる

永い不在の歳月の後に

私は再び帰つて来た
ちよつとも傷けられも
また豊富にもされないで

悔恨にずつと遠く

ザハザハと河は流れる
私に残つた時間の本性

孤独の正確さ

その精密な計算で

熾さかんな陽の中に

はやも自身をほろぼし始める

野朝顔の一輪を

私はみつける

かうして此処に寝転ぶと

雲の去来の何とをかしい程だ

私の空をとり囲み

それぞれに天体の名前を有つて

山々の相も変らぬ戯れよ

噴泉の怠惰のやうな

翼を疾つくに私も見捨てはした

けれど少年時の

飛行の夢に

あはれ私は 見捨てられは
しなかつたのだ

即興 或る原稿催促者に

……真実いふと 私は詩句など要らぬのです

また書くこともないので

不思議に海は躊躇ためたうて

新月は空にゐます

日日は静かに流れ去り 静かすぎます

後悔も憧憬もいまは私におかまひなしに

奇妙めづかに明い野のへんに

独り歩きをしてゐるのです

静かなクセニエ

私の切り離された行動に、書かうと思へば誰でもクセニエ
を書くことが出来る。又その欲望を持つものだ。私が真面目
であればある程に。

と言つて、たれかれの私に寄するクセニエに、一向私は恐
れない。私も同様、その気なら、(一層辛辣に)それを彼ら
に寄することが出来るから。

しかし安穩を私は愛するので、その片よつた力で衆愚を喚すクセニエから、私は自分を衛らねばならぬ。

そこでたつた一つの方法が私に残る。それは自分で自分にクセニエを寄することである。

私はそのクセニエの中で、いかにも悠々と振舞ふ。たれかれの私に寄するクセニエに、寛大にうなづき、愛嬌いい挨拶をかはし、さうすることで、彼らの風上に立つのである。悪口を言つた人間に懇懃にすることは、一的美徳で、この美徳に会つてくづほれぬ人間は少い。私は彼らの思ひついた語句を、いかにも勿体らしく受領し、苦笑をかくして冠のやうにかぶり、彼らの目の前で、彼らの慧眼を讃めたたへるのである。私は、幼児から投げられる父親を、力弱いと思ひこむものは一人もをらぬことを、完全にのみこんでゐてかうする。しかし、私は私なりのものを尊ぶので、決して粗野な彼らの言葉を、その俣には受領しない。いかにも私の丈に合ふやうに、却て、それで瀟洒に見えるやう、それを裁ち直すのだ。

あゝ！ 何といふことだ！ かうして私は静かなクセニエを書かねばならぬ。

読人不知

水の上の影を食べ

花の匂ひにうつりながら
コンサートにきりがなし

●萩原朔太郎編『昭和詩鈔』（富山房、昭15・3・18）

「帰郷者」「私は強ひられる——」「冷めたい場所で」「わがひとに与ふる哀歌」「かの微笑のひとを呼ばむ」。「帰郷者反歌」の掲載がない以外、詩集（『哀歌』）本文との異同なし。

●編なし『現代詩人集 第五卷』（山雅房、昭15・9・20）

章題「夜と昼」。章扉に（いろいろのこと思出す桜かな 芭蕉）、肖像写真一頁。詩集（『春のいそぎ』『夏花』『反響』）／初出（『宿木』は『むらさき』昭12・7、『柳』は『コギト』昭14・6、『朝顔』は『新日本』昭13・4）本文との異同が多くの詩篇に亘って細かく見られ、全篇をそのまま掲げる。

誕生日の即興歌

くらい 西の屋角に 翻筋斗うつて そこいらにもつるる
あの響 樹々の喚びと 警むる 草のしつしつ よひ毎に
吹き出る風の けふいく夜 何処より来て ああ にぎはし
や わがいのち 生くるいはひ まあ、子や この父の為

灯ともしびさげて 折おつて来い 隣となり家の ひと棲すまぬ 籬まがきのうちの
かの山茶花さざんくわの枝えだ いや いや 闇やみのお化ばけや 風かぜの洞間どうまこま声こゑ
それさへ 怖こはくないのなら 尤とがむるひとの あるものか 寧なろ
るまあ子 こよひわが祝いはひに あの花はなのころを 言いはうな
ら「ああ かくて 誰たがために 咲さきつぐわれぞ」さあ 折を
つておいで まあ子

自註

まあ子まあいはわが女の子の愛称。私の誕生日は十二月十日。この頃、海から吹上ぐる西風烈しく、丘陵の斜面に在るわが家は、動揺して、眠られぬ夜が屢々である。

家の裏は、籬で隣家の大きな庭園につづいてゐて、もう永くひとが住んでゐない。一坪の庭もない私は、暖い日にはよくこつそり侵入して、その荒れた草木の姿を写生する。

小曲

天空そらには 舟の 影うつり
しづかに めぐる 水ぐるま

手にした 灯ともし いまは消し

夜道して来た 牛方と

五頭の牛が あゆみます

ねむたい 野辺の のこり雪
しづかに めぐる 水ぐるま
どんなに 黄金きんに 光つたる
灯ともしの想おもひ 牛方と
五頭の牛が あゆみます

しづかに めぐる 水ぐるま
冬木ふゆぎの うれの 宿り木よ

しとしと あゆむ 牛方と

五頭の牛の 夜のあけに

子供がうたふ をさな歌

宿木

冬のあひだ中 かれ枯がれた櫓うしの樹きに

そのひと所だけ青んでゐたやどり木の、

いまはこの目に区別もつかずに、

すっかりすっかり梢は緑に燃えてゐる。

何故なぜにまた冬の宿木のことなど思ふのか。

外部世界はみんな緑に燃えてゐる。

数へ切れないほどの子供らが

花も過ぎた野薔薇のやぶで笑つてゐる。

そしてわたしの恋人はとうの昔

ひとの妻になつてしまつた。

疾うの昔に などとなぜに私は考へるのか。

いゝえ、わたしに

やつと今朝青春は過ぎて行つたところだ。

窓べにつるした破璃壺に

あはれに花やいで 金魚の影は、

はつきりとそのことを私につげる。

柳

やま吹の 咲きゐる垣ぬ(てい)のへに、やなぎは幾日いくか

ちりにし穂状花ぞ。

葉をもるしろきひかりに交はりて、

わが取りおとす、堪へごころ ひとに知られず。

春をよろこぶものの目に、朝かげと

夕陽ゆふひのひかり目立たぬ季節なれ、

山吹はいつか移りし、卯うのはなのいましろき 垣べを

柳はおのれさ揺れつつ、青くかすかに照らすなり。

かかるとき、かかるころの、玉ゆらの青きかげに
誰れか驚きて見入らざらん。

ながきとし月、過計なかりはりの心われより奪ひにし

かの 奇しくあかるきおもかげぞ そこに立てれば。

灯台の光を見つつ

くらい海の上に 灯台の緑のひかりの

何といふやさしさ

明滅しつゝ 廻転しつゝ

おれの夜を

ひと夜 彷徨さまよふ

さうしておまへは

おれの夜に

いろんな いろんな 意味をあたへる

嘆きや ねがひや の

いひ知れぬ――

あゝ 嘆きや ねがひや 何といふやさしさ

なにもないのに

おれの夜を

ひと夜

灯台の緑のひかりが 彷徨ふ

そんなに凝視めるな

そんなに凝視めるな わかい友

自然が与へる暗示は

いかにそれが光耀にみちてゐようと

凝視めるふかい瞳には つひに悲しみだ

鳥の飛翔の跡を天空にさがすな

夕陽と朝陽のなかに立ちどまるな

手にふるる野花は それを摘み

花とみづからをささへつつ 歩みを運べ

問ひはその俣に答へであり

堪へる痛みもすでにひとつの睡眠だ

風がつたへるしろい稜石の反射を わかい友

そんなにながく凝視めるな

われ等のかなしみは

自然の多様と変化のうちにあり

あゝ歎びと意志も亦そこにあると知れ

燕

門の外かどとの ひかりまぶしき 高きところに 在りて 一羽燕

ぞ鳴く

単調にして するどく 翳なく

あゝ いまこの国に 到り着きし 最初の燕ぞ 鳴く

汝 遠くモルツカの ニユウギニヤの なほ遙かなる

彼方の空より 来りしもの

翼さだまらず 小足ふるひ

汝がしき鳴くを 仰ぎきけば

あはれ あはれ いく夜凌げる 夜の闇と

羽うちたたきし 繁き海波を 物語らず

わが門かどの ひかりまぶしき 高きところに 在りて

そはただ 単調に するどく 翳なく

あゝ いまこの国に 到り着きし 最初の燕ぞ 鳴く

朝顔

父の没後、母は故里の家をたゞみ、朝顔の種を持つて、都会のわたしの小家に住むためにやつて来た。そして間もなく死んだ。わたしはこの頃「あさがほ」と母の手で書かれた紙袋の、櫓に吊してあるのを発見した。

わたしはうけ継がう この朝顔の種を

夏の日わが庭に咲き出る

あゝその花の姿の

絶えよとばかり 想つただけで目くるめく

けれど 八十八夜が来れば

きつとわたしは種を下地さう

そして花の盃から

飲み乾さう 死に振ひたつ勇氣を

いかなれば

いかなれば今歳ことしの盛夏のかがやきのうちにありて、
なほきみが魂にこそこの夏の日のひかりのみあざやかなる。

夏をうたはんとては殊更に晩夏の朝かげとゆふべの木末こめをえ
らぶかの蝸あいわんの哀音を、
いかなればかくもきみが歌はひびかする。

いかなれば葉広き夏の蔓草のはなを愛して曾てそをきみの時
かざる。

曾て飾らざる水中花と養はざる金魚をきみの愛するはいか
に。

砂の花 富士正晴に

松脂は つよくにほつて

砂のご門 砂のお家

いちんち 坊やは砂場にゐる

黄色い つはの花 挿して

それが お砂の花ばたけ

地から二尺と よう飛ばぬ

季節おくれの もんもん蝶

よろめき結る 砂の花

坊やはねらふ もんもん蝶

その一撃に

花にうつ俯す 蝶のいろ

あゝおもしろ

花にしづまる 造りもの

「死んでる？ 生きてゐる

松脂は つよくにほつて

いちんち 坊やは砂場にゐる

●前田鉄之助編『全日本詩集 第三卷』（詩洋社、昭15・11・25）

「小曲」。詩集（『春のいそぎ』）本文との異同、（天空には雲の影移り）が（そらには 舟の影うつり）。

●田中克己／保田与重郎／肥下恒夫編『コギト詩集』（山雅房、昭16・6・15）

「わが家はいいよ小さし」「百千の」「蚩」「夏の終り」「わが笛 故辻野久憲君に捧ぐ」「早春」「誓ひ」「拒絶」「詩一篇」。詩集（『春のいそぎ』）／初出（『わが笛』）は『コギト』昭12・12、「誓ひ」は『コギト』昭11・3、「拒絶」は『コギト』昭10・12）本文との異同、「わが家はいいよ小さし」（もの音絶えし）が（もの絶えし）。「夏の終り」題が詩集では「夏の終」。「早春」、（つづかない）が（つづかない）、（梨？ 桃？ 薺）が（梨？ 桃？ 薺）、（ただ）が（たゞ）。「詩一篇」、題が詩集では「金星」。

●日本詩人協会編『現代詩 昭和十六年春季版』（河出書房、昭16・5・30）

「梅の花」。初出（『コギト』昭16・4）本文との異同が全体に亘って細かく見られ、全文をそのまま掲げる。初出は「池沢茂に」の副題。

おれはけふも写生をしてゐる。梅と水仙と——。けれど、まだ書齋はずるぶんと冷える。家の者らを遠ざけて、軍國の早春に、終日、かうして花を描いてると、草莽に隠れた臣、とても云ひたい感のあるのも、中々妙だ。それは自ら描くひとの胸に、つましい花のこころの移るのであらうか。総じて花の徳とは、こんなものなんだらう。

それにつけても思ひ出す。君がいつか訪ねて来た時も、おれは炬燵の中で写生をしてゐた。君はきちんと膝を折つて坐り、炬燵の中のおれを先生と呼びかけ——なる程おれは、君の学んだ中学で、先生であつたには相違ないが——おれがごのごろ懈けてゐると言ひ、東京の元氣のいゝ友人らのことを、ちよつぱり匂はせて、詩作の少いのを責め、真面目な顔で少し揶揄して、絵など不機嫌に描いてるのを憐れんだものだ。いつまでも頑固に膝折つたまゝ。

第一、いつまでも先生などと、洒落齋。その糞真面目が氣に喰はぬ。世には示さぬわが歌のふかい心は、君なんぞには分らないのぢや。それより、御本尊こそ、こゝろで一丁、傑作小説出さねばなるまいよ。それに、その頃おれは、例のひどい厭人病で、君の顔など見たくもなかつた。

今日もおれは水彩の写生をしてゐる。梅と水仙と——。けれどまだ書齋はずるぶんと冷える。君が駐屯してゐる支那の、——どこだつたかな——とにかく何処かの、戦争してゐる辺

の気候は、いまごろどんなもんだらうね。まあ気候など、どうでもよい。目出度く還つてこれるか、どうか、は分りもすまいが、もし還つて来るのなら、けふのやうな、機嫌のいい日に訪ねておいで。きちんと膝を折つて、先生と呼びかけるには、軍服の君の姿は、きつとふさはしいにちがひない。その時は、君も言ひはすまいよ。「このごろ先生、お作はいかがです。」などは。それでも、矢張下手な絵など書いてあるおれは、相変らずの自分にいくらか照れて、「どうだ、この絵を見てごらん。」などと笑つて言ふだらう。そして、台所から、心細い、少しの酒を持つて来て、写生用の梅の花を一輪とり、盃に浮けて飲ましてあげよう。すると君はきつと、花も一緒に飲み乾したものが、どうか、一寸困つて、それでも例の真面目くさつた顔をして、「戴きます。」と一礼して、無理に一緒にのみこむに相違ない。それを思ふと、をかしい。

思ひみよ岩そそぐ垂水を離れたる

去年こぞの朽葉は春のみづふくるる川に浮びて
いまかろき黄金きんごのごとからん

●山田岩三郎／村上成実編『現代日本年刊詩集 昭和十六年版』(山雅房、昭16・7・20)

「燕」。詩集(「夏花」)本文との異同なし。

●日本詩人協会編『現代詩 昭和十六年秋季版』(河出書房、昭16・11・20)

「七月二日、初蟬」。詩集(「春のいそぎ」)本文との異同、題が詩集では「七月二日・初蟬」、(眠から)が(眠りから)、(聞いているので)が(聴いているので)。

●前田鉄之助編『全日本詩集 第四卷』(詩洋社、昭17・6・10)

「わが家はいよいよ小さし」。詩集(「春のいそぎ」)本文との異同、(足とどむと)が(足とむと)。

●日本詩人協会編『現代詩 昭和十七年春季版』(河出書房、昭17・6・27)

「詩一篇」。詩集(「春のいそぎ」)本文との異同、題が詩集では「つはものの祈」、(いくさの場知らぬ我ながら)が(いくさを知らぬわれながら)。

30 ●中山省三郎編『国民詩 第一輯』(第一書房、昭17・6・)

「海戦想望」。詩集(「春のいそぎ」)本文との異同、(御軍みいくらは)が(御いくさらは)。

●大政翼賛会文化部編『軍神につづけ』（大政翼賛会宣伝部、昭18・2・10）

「軍神につづけ」。詩集（『春のいそぎ』）本文との異同、題が詩集では「述懐——大詔奉戴一周年に当りてひとの需むるまゝに」、〈千早振〉が〈千早振〉、〈得堪へで〉が〈得堪へで〉、〈一度〉が〈一度〉、〈堪ふる戦は〉が〈堪ふる戦さは〉、〈わが軍神が〉が〈わが軍神が〉、〈皇国の誉なりける〉が〈皇国の誉なりけれ〉、〈夜〉が〈夜〉、〈己が思 子と妻に言ふ〉が〈己が思 子と妻に言ふ〉。

●高村光太郎／丸山薫／蔵原伸二郎／村野四郎／北川冬彦／逸見猶吉／岡本潤／三好達治／菱山修三／勝承夫／岩佐東一郎／草野心平／菊岡久利編『国民詩選 昭和十八年版』（興亜書局、昭18・5・20）

「なれとわれ」。詩集（『春のいそぎ』）本文との異同なし。

●百田宗治編『詞華集初花 たしなみ叢書』（増進堂、昭18・10・1）

「海戦想望」。詩集（『春のいそぎ』）本文との異同、〈御軍らは〉が〈御いくさらは〉、〈バタヴィアの〉（第二聯）が〈バダヴィアの〉。

●稻津静雄／大島博光／大木実／村上成実／野田字太郎／山

田岩三郎編『近代名詩選集』千歳書房、昭19・2・10）

「野分に寄す」「わが家はいよいよ小さし」「第一日」。詩集（『夏花』『春のいそぎ』）本文との異同、「わが家はいよいよ小さし」、〈そを出でてわれの〉が〈そを出でわれの〉、〈もの音絶えし〉が〈もの絶えし〉、〈たゞ〉が〈ただ〉、〈おりつつふと足とどむとある枯れし園生〉が〈おりつつふと足とどむるとある枯れし（改行）園生〉。「第一日」、〈その中に〉が〈そのなかに〉、〈何処よりともなく道の端〉が〈いづこよりともなく 道の端〉、〈つづけさま〉が〈つづけさま〉、〈いくばくの〉が〈いくばくの〉、〈言ひ終りて〉が〈いひ終りて〉。

●日本未来派編『現代日本代表作詩集 一九四八年版』（海口書店、昭23・10・30）

「夕映」。詩集（『反響』）本文との異同、〈とどく〉が〈とゞく〉、〈かがやく〉が〈かゞやく〉、〈幼い者らと〉が〈幼き者らと〉、〈ひかりの中〉が〈ひかりのなか〉、〈首のとれた〉が〈首の取れた〉、〈めいめいの〉が〈めいゝの〉、〈行はれる日日のかはいい〉が〈行なはれる日々のかはいい〉、〈つづる〉が〈つゞる〉、〈ねがはくはこのわが行ひも〉が〈ねがわくはこのわが行なひも〉、〈あゝせめてはあのやうな小さい〉が〈ああせめてはあのやうに小さな〉。

●編なし『年刊詩集 一九四八年版』（炬書房、昭23・10・1）

「夏の終り」「路上の祈り」「廻灯笼」。詩集（『反響』）本文との異同、「夏の終り」、「よこぎり」が（横ぎり）、（ちひさく）が（小さく）、（おひ越して）が（追ひ越して）。「路上の祈り」、題が詩集では「路上」、（大群のやう）が（大群のやうに）、（乗りもの）が（乗り物）、（ただ）が（たゞ）、（気附かれず）が（気付かれず）、（向うに）が（向ふに）、（光る藪の）が（ひかる藪の）。「廻灯笼」、題が詩集では「中心に燃える」。

●日本ペンクラブ編『現代詩 現代日本文学選集第一一巻』（細川書店、50・5・31）

「私は強ひられる——」「わがひとに与ふる哀歌」。詩集（『哀歌』）本文との異同、「わがひとに与ふる哀歌」、（あるひは）が（或は）。作品掲載に先立ち、「作者のことば」として、

この二篇はともに、たしか一九三二年（昭和七年）の頃のもので、二十七歳、わが詩作の最初期に属する。

最近のものものせたい心持があるが、みづからえらぶのがものういから、しばらく編者の選に従ふ。

とある。『定本全集』逸文と捉えるべきであろう。

●草野心平編『日本恋愛詩集 世界恋愛文学名作選』（羽田書店、昭26・8・15）

「淀の河辺」「冷たい場所だ」。詩集（『春のいそぎ』「哀歌」）本文との異同、「淀の河辺」、（ここと）が（こゝと）。「冷たい場所だ」、題が詩集では「冷めたい場所だ」、（冷めたい）が（冷たい）。

●丸山薫編『新しい詩の本 小学生全集第一七巻』（筑摩書房、昭27・1・31）

「子どもの絵」。初出（『文芸往来』昭24・7）本文との異同、新（現代）かなづかいを採用、題が初出では「子供の絵——疎開地に住みついて」（沢山沢山）が（たくさんたくさん）、（お母さん）が（おかあさん）、（まん中をすつと）が（まんなかをすうと）、（遠く右の端に）が（とおく右のはしに）、（あゝ野の電線）が（ああ 野のでんせん）、（哀れな家）が（あわれな家）、（隅っこに）が（すみっこに）、（窓が出来 その下は草）が（窓ができ その下の草）、（お父さんの）が（おとうさんの）、（一面くろく塗りたくられる）が（いちめんくろくぬりたくられる）、（ゴウトウダ）が（ゴウトウだ）、（でくのぼう）が（でくのぼう）。↓昭37・9・15 新版（巻数名「16」、内容同一）。